

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24720272

研究課題名(和文) 学習者の特性がジャンル・アプローチに及ぼす影響 教材開発に向けて

研究課題名(英文) Learner Characteristics and a Genre-Based Approach: Toward Materials Development

研究代表者

マスワナ 紗矢子 (Maswana, Sayako)

早稲田大学・オープン教育センター・助教

研究者番号：60608933

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、英語アカデミックライティングで注目されているジャンル・アプローチを学習者の観点から検討し、より効果的な教材作りへの示唆を得ることを目的としている。予備調査の結果を踏まえ、さまざまな背景を持つ学部生・院生100名を対象にアンケート調査を行い、学習者特性を抽出した。抽出された特性とライティングの成績結果から、高・低得点学習者の特性が明らかとなった。また、本調査から得られた知見を教材に応用するため、現行のアカデミックライティング教科書を網羅的に分析し、教材開発に向けた提案を行った。

研究成果の概要(英文)：This research aimed to explore a genre-based approach to academic writing with a focus on learner characteristics, and the results were expected to be incorporated into developing more effective materials. The questionnaire survey was administered to 100 college students to extract learner characteristics. The extracted factors were then analyzed in relation to the writing performances, the scores the participants received after writing a research paper introduction. After a comprehensive examination of current academic writing textbooks, possible materials were suggested based on the research results.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育 ジャンル・アプローチ 学習者の特性 学術目的の英語

1. 研究開始当初の背景

近年、大学英語教育において ESP (特定目的の英語) 教育が注目されている。ESP 教育では、「ジャンル」(特に、研究論文)に焦点を当てた学習(ジャンル・アプローチ)の重要性が認識され(Dudley-Evans & St. John, 1998 など)、特定ジャンルの分析研究が盛んに行われている。多くの場合、対象ジャンルのテキスト構造レベルでの規則性や社会文化的背景の分析、頻出語彙や表現の抽出が中心となり、それらの研究結果をライティング指導に応用する傾向が見られる(Swales, 1990, 2004)。

ジャンル・アプローチの有効性については、指導前後の学習者のライティングの比較(Henry & Roseberry, 1998)、学習プロセスの解明(Cheng, 2006, 2007)、学習者の意識変化の調査(Yayli, 2011)などがあり、実証的な研究が行われている。しかし、これらの研究では学習者の特性とアプローチの有効性との関係性について精査されることはなかった。というのも、ジャンル・アプローチは、ESP 教育で用いられる指導法であるため、学習者については「特定のニーズがある」ことが特性の必要条件とされている。学术论文のジャンル・アプローチであれば、学术论文を書く必要がある学習者、というのが学習者の特性であり、ニーズ・動機とある程度の英語力があることが必要十分条件とされ指導が行われている。

しかしながら、上記の条件を一見満たしていると思われる学習者の中でも、アプローチの有効性に差が見受けられる。よって、当該アプローチをより効果的に用いるためには、英語習熟度、知能特性、動機付けといった学習者特性がアプローチに与える影響を調査すべきだという考えに至った。本研究は、学術目的の英語教育の文脈におけるジャンル・アプローチの有効性について、学習者特性という観点から検討する、今までにない研究と位置づけられる。本研究結果から、多様な背景を持つ学習者を理解し、より具体的に効果的な教材開発が可能になると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、学習者のニーズに基づく効率的なアプローチとされるジャンル・アプローチの有効性を学習者の特性から捉え直したものであり、研究目的は以下のとおりである。

まず、ESP ジャンルに基づいた指導を受ける学習者に関連性の高い特性と考えられる、英語習熟度、知識特性、動機付けなどの質問項目を用意し、包括的な学習者像を捉える。そして学習者特性が、ジャンル・アプローチの有効性(本研究ではライティングの成績を指標として採用)に影響を与えるか否か、そしてどの特性が正もしくは負の影響を与えるかについて明らかにする。

本研究では、学習者特性の分析結果をアカ

デミックライティング教材開発に取り入れることを視野に入れている。しかし、各ジャンルや学術分野の特異性が強調され教材への応用が求められているにもかかわらず、現在使われている教材を網羅的に調査した研究が乏しいことが、現実の課題として挙げられる。このため本研究では、現行のアカデミックライティングの教科書を調査し、学習者特性の結果と照らし合わせてどのような点において教材を改善できるかを考察し、今後の教材開発における有用な指針を提供する。

3. 研究の方法

データ収集の準備のためにタスクおよびアンケートを開発した。学習者特性の質問項目として、英語習熟度、知能特性、動機づけを扱った。知能特性では Armstrong (2009) の質問紙を参考に、特に本研究が対象とする学習者に関連の高い知能特性をいくつか選択した。タスクは、Swales and Feak (2000, 2004) に掲載されているテキストやタスクを参考に、ジャンル・アプローチに基づくタスク教材を作成した。教材には、テキスト構造と言語使用に関する明示的な説明と、発見型タスクと手続型タスクを含んだ。また、学習者が行っている専門の研究もしくは授業で行った調査についての序論を書くタスクを最後に設けた。予備調査では、質問紙調査のみならずインタビューも行い、アンケート実施に対するフォローアップを行った。予備調査の結果から、関連性の低い項目や重複を削除し、市販の教材作成ソフトを使いタスク教材を作り、オンライン上で回答ができる準備を整えた。

本調査では、学部生・院生 100 名に対してオンライン教材および学習者特性測定の問題紙調査を実施した。3 か月の期間を設けてデータを回収したのち、データの整理・分析を行った。学習者特性の分析については、各項目に対する 5 段階評価を集計し、探索的因子分析を行い、学習者特性の因子を特定した。次に、最終ライティングの評価スコアと抽出された特性因子の傾向を因子得点から明らかにした。序論ライティング評価では、言語使用と構造について各 5 点、計 10 点として採点した。申請者とライティング指導教員が採点を行い、評価者間信頼性を確認した。アンケート実施後に、参加者数名に対してインタビュー調査を実施し、アンケート調査を補完した。

上記分析結果を教材開発に応用するために、現行のアカデミックライティング教科書を 20 冊分析した。具体的には、教科書にかかわる項目として、タスク、テキストのジャンルとトピック、アカデミックライティングに特徴的な項目として、ライティング規則のほか、批判的思考、ジャンル、分野、読み手といったコンセプトについても調査の対象とした。改善点や、結果を取り込める要素を検討し、市販の教材作成ソフトを使い試作を

試みた。

4. 研究成果

学習者特性として、英語の学習方略では英語母語話者（もしくは上級話者）からのフィードバックとテキストのパターン認識、一般的な学習志向では、サイエンス志向とコミュニケーション志向、動機づけでは、英語学習の楽しみ、英語使用の希望、将来の英語の必要性といった因子が抽出された。学習者を序論ライティングの成績に基づき、グループ1（言語使用・構造ともに低得点）、グループ2（言語使用は高得点だが構造は低得点）、グループ3（言語使用は低得点だが構造は高得点）、グループ4（言語使用・構造ともに高得点）に分類し、それぞれ抽出された特性の因子得点の平均を用いて傾向を比較した。各グループには、アカデミックライティングの必要性と英語レベルが高い学習者が含まれていた。学習方略においては、グループ1では両方略を用いる学習者が少なく、グループ4ではパターン認識だけが顕著に多かった。知能特性として抽出された二つの学習志向では、グループ4だけ得点が高い傾向がうかがえた。動機づけでは、内発的・外発的動機付け双方においてグループ3と4の得点が高かった。このように、ジャンルに基づいた学習の成績別に各学習者特性の傾向が明らかになった。

続いて、アンケート調査の補完と教材使用について質的な考察を加えるため、インタビュー調査を行い、教材のインターフェースなどに対する感想を得た。また、教材にジャンル分析の結果を用いる方法の一つとして、テキストの構造と言語の特性を可視化する試みを行い、実行可能性を確認した。これらの結果を教材開発に活かすために必要な資料として、現行のアカデミックライティングの教科書を収集し、網羅的に調査した。その結果、各教科書は独自性を主張しているものの、扱っている内容やアプローチは共通する部分が多く見受けられた。教科書調査と学習者特性分析の結果から、教材開発に向けた提案がいくつか挙げられる。

まず、教科書で取り入れられているのは主にライティングとリーディングで、リーディングには Discussion が付随している場合がある。高得点学習者がコミュニケーション志向である傾向を見ると、スピーキングの要素を取り入れることが考えられる。インタビューで明らかになったように、クラスメートや教員という周辺環境に大きく依存する Discussion は、満足な結果を得られないことが多々ある。したがって、例えば、学習者自身の研究（計画）を数分でまとめて口頭で説明する、といったスピーキングのタスクが考えられよう。次に、母語話者からのフィードバックを好まない低得点学習者は、母語話者のフィードバックを受けた方が負の影響を避けられるとも考えられるため、フィードバックの種類を選べる教材の開発が提案され

る。

高得点学習者はチャートやグラフなどの可視化情報を好むという結果も出ている。現行の教科書では Mind map、Brainstorming、Outline 作成のタスクで可視化のアプローチが使用されているが、その他にも、学習者が執筆したテキスト構造や、サンプルテキストの修辞構造と言語的特徴を融合させた可視化が提供できよう。高得点学習者が使用する学習方略のパターン認識やアンケートの自由回答が示すように、より豊富なテキストのサンプルや分析タスクを提供することが必要である。また、現行教科書は、ジャンルの特性よりもアカデミックライティングの特性を中心に据えているため、今後は多様なアカデミックジャンルを取り入れることが推奨される。最後に、教科書では一般学術目的の英語と特定学術目的の英語が完全に分離した形で提供されているが、デジタル教材を使い異なるトピックやレベルを用意することによって、両者の橋渡しの役割を担うことが期待される。

以上の結果を応用したデジタル教材の試作を試みた。今後、学習者の特性に柔軟に対応できるアカデミックライティング教材を開発していくにあたり、参考となる資料といえよう。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

Maswana, S. (2014). Learners' characteristics and a genre-based approach to academic writing. *Information Communication Technology Practice & Research 2013* (in press). 査読有。

Maswana, S. (2014). A survey of English academic writing textbooks. *Proceedings of the 19th Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics* (in press). 査読有。

〔学会発表〕（計3件）

Maswana, S. Visualization of textual structure based on move analysis of research papers. 大学英語教育学会第52回国際大会, 京都大学. 2013年8月31日.
Maswana, S. Learners' characteristics and a genre-based approach to academic writing. The Pan-Pacific Association of Applied Linguistics International Symposium of World Englishes, SEAMEO RELC, Singapore. 2014年2月17日.

Maswana, S. A survey of English academic writing textbooks. The 19th Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics, 早稲田大学. 2014年8月18日.

6 . 研究組織

研究代表者

マスワナ紗矢子 (MASWANA SAYAKO)

早稲田大学・オープン教育センター・助教

研究者番号：60608933